

次の文章を読んで下の問い（問1-問4）に答えなさい。下線部の番号は問いの番号と同じです。解答はすべて日本語で書きなさい。なお、本文中に*で表示されている語彙については本文の後ろに注があります。（高3 SA 2001年 千葉・前期）

One of the few predictable things about evolution is its unpredictability. Which dinosaur* could have guessed that descendants of the small creatures playing at its feet would soon replace it? And how could it have been predicted only 30,000 years ago that one moderately common primate would be among the most abundant of mammals while its genetically almost indistinguishable relative was near extinction?

The opportunistic nature of evolution — its ability to cope with the unexpected — means that, just as in politics, it is almost impossible to guess what is going to happen next.

There have, of course, been many attempts to do so. Many predictions by authors of greater or less literary merit about the future of humanity involve a Lamarckian* view of evolution. Heavily used organs get larger; those no longer needed disappear.

Less pretentious Utopias have our descendants with X-ray vision or computers as brains. However, if we can be sure about anything it is that (1)humanity will not become superhuman. We will, as always, build on our present weaknesses rather than making a new evolutionary start. The mechanisms of change that shape the future will certainly be those that led to modern humans.

Biologists who try to predict the future always run the dreadful risk of being taken seriously, either by themselves or — even worse — by politicians who cannot believe the depth of our biological ignorance. The early days of human genetics* were marred by statements of great (and quite unjustified) confidence about the fate awaiting us unless genetically defective individuals were prevented from reproducing.

Ideas derived from the eugenics* movement led to the horrors of the Nazi* experiment; and, although this is less widely known, to the American immigration laws that prevented Eastern Europeans from escaping it. Since then most geneticists have been more careful about discussing the social implications of their subject and less confident about their ability to do so. There have, nonetheless, been changes in the genetics of human populations that are certain to affect our evolutionary future. We can at least speculate about what that might be.

(2)Evolution involves variation, a struggle for existence, and natural selection. Random events also play an important part, particularly in small populations. What will happen to these processes over the next 1,000 years?

The amount of variation may well go up: migration, the melting pot, means that the genes* of the peoples of the world will mix together into a rich genetic soup and there will be no shortage of the raw material of evolution. In the West at least (an important proviso), most babies born now survive until they themselves have babies, so that existence is less of a struggle than it was. Natural selection involves inherited differences in the chance of surviving that struggle, and as most of us do survive nowadays until we have passed on our genes, the strength of selection has decreased.

Evolution takes place quickly in small and isolated populations, as there is then a chance for random accidents to change the fate of a gene very quickly. Such populations are now very rare and most people no longer marry the girl or boy next door — the evolution of the bicycle made a big difference to our future.

Optimists have often claimed that medical advances and improvements in our environment will greatly increase our length of life; men may become immortal.

Without genetic variation, there can be no evolutionary progress.

Depressingly enough, (3) it seems that we may already have reached the end of the road of increasing human longevity*, in Western societies at least. The great killer of past centuries was infectious disease. However, improvements in public health have had a dramatic effect on life expectancy*. In the United States, mean life expectancy at birth has risen during the present century from 47 to 75 years.

Infectious disease has been largely controlled, and cancer and heart disease are now among the main causes of mortality. These are, of course, influenced by external agents such as smoking or diet.

However, recent attempts to control these have had little effect on length of life; and adult life expectancy has scarcely increased in the last decade. For example, women of 65 had a life expectancy of 18.6 years in 1989 — exactly the same as in 1979.

It seems that far more of us now reach the age limit set by genetically programmed and intrinsic* decay of our body processes; and as selection works much less effectively on those who have already reproduced or who are unable to contribute to the upkeep of their relatives, it is unlikely that our life expectancy can continue to increase.

It may even be that we are near the end of our evolutionary road, that we have got as close to Utopia as we ever will. (4) But remember the dinosaurs.

(注) dinosaur 恐竜 eugenics 優生学 gene 遺伝子 genetics 遺伝学
intrinsic 必然的な, 内在的な Lamarckian ラマルク(フランスの博物学者・進化論者)の life expectancy 余命 longevity 寿命
Nazi ナチスの

問1 下線部(1)の予測はどのような根拠にもとづいていますか。

問2 筆者は、下線部(2)で挙げられている「変異」「生存競争」「自然淘汰」の3つのプロセスについて、今後どうなると予測していますか。

問3 下線部(3)はどのような根拠にもとづく判断ですか。具体的な例を挙げて説明しなさい。

問4 下線部(4)の「上に述べた恐竜のことを忘れないように」ということばで、筆者は人類の未来についてどんなことを暗示していますか。

※ダーウィンのいわゆる進化論に、部分的に異を唱える研究者は決して少なくない。何ら科学的実証のなされていない単なる仮説にすぎないと極言する人もいる。そもそも進化論とは何かをより正確に知るきっかけにしたい。千葉大の英語長文読解問題としては、量的には穏当(800語)なほうだが、内容のレベルはきわめて高い。こういう問題が医学や生物学専攻とは関係のない受験生にも課されるという、難関大学入試の現実を改めて肝に銘じておこう。ただし設問は意外と取り組み易い。

国公立大学の中でも、圧倒的に記述形式の比率が高く、質・量共に手強いのが千葉大学の英語の特徴であるが、主に医学部受験生を対象と考えているためとも言われる。入試の歴史に残るといっても過言ではない、2005年の超長文3題を別とすれば、長文2題+英作文(2007年からは従来の和文英訳から自由英作文形式に変わっている)が基本である。

紙数の都合で進化論やラマルクについての解説を省く(関心のある人は Internet を利用してほしい)代わりに、予備知識不要の解答法について述べておきます。

【問1 解答例】人間は新しく進化を始めるのではなく現在の弱点が土台にあること、変化のメカニズムは過去も未来も同じであること。

【問2 解答例】「変異」は量が増大し、「生存競争」は緩やかになり、「自然淘汰」は力が弱くなる。

【問3 解答例】20世紀には合衆国の平均寿命は47歳から75歳に上昇したが、この10年間はほとんど延びていないこと(、65歳の女性の1989年の平均余命は10年前と同じ18.6年だったこと)。

【問4 解答例】進化の最終段階に近づいた人類は、恐竜と同じように絶滅する可能性があること。

【解説】本文を一読して内容を把握するには、ダーウィンの進化論、ラマルクの進化論、分子生物学、分子遺伝学、集団遺伝学等に関する最少限の知識が必要である。しかし、こうした分野の予備知識が無いとまったく歯が立たないかというところ、そうではない。本文の内容を要約しなさい、といった設問と違い、また設問に該当するのが本文中のどの箇所であるかをまず特定しなければならない設問とも違い、すべて下線部について述べなさい、という形式である。

したがって、下線部に書かれていることの原因や結果、具体例等に当たると思われる箇所を、基本的に下線部の近くに見つけて、その箇所を簡潔な日本語にまとめればよい。なお、2004年度と2005年度には字数の指定が付いていた(最大45字)が、現在は付いていない。高3 SAの 24 の千葉大過去問でも指摘したとおり、一般的には字数指定があったほうが答え易いのだが、答えに該当する箇所の英文の分量に比して指定の字数が明らかに少ないと、該当箇所を簡潔に日本語に訳しても字数オーバーになってしまう。つまり英文和訳の力に加えて英文要約の力が求められることになり、設問のレベルがアップする。そのことが、出題者が字数指定を止めた理由かどうかはわからないが、本来は相当に簡潔な解答を求めているはずである。ただし字数制限が無い以上、解答欄に納まっていれば、まったく無関係な箇所まで拾わない限り大きく減点されることはないと考えてよい。

- (1) 下線部の後、段落の終わりまでが該当箇所であることはすぐにわかるが、そのまま拾うと100字を越えてしまう。ある程度の要約は欠かせない。
- (2) 設問文に十分なヒントがあるので、答えが次の段落にあることは見抜けるはずだ。中途半端な要約では大変な字数を要するので、思い切って省いていけば答えはごく簡単であり、内容を正確に理解できていなくても解答は可能である。
- (3) 具体的な例を挙げて、という指定があるので、具体的な数字を拾った。2つ下の段落の However, ...; and adult life expectancy has scarcely increased in the last decade. まで拾わないと意味をなさないが、その後の For example 以下はまさに具体例そのものであり、ここまで含めるかどうか、字数指定がないと判断に迷うところ。しかし、公衆衛生や伝染病にまで触れると字数が多くなりすぎる。なお、このパッセージのような雑誌や新聞の記事と、書籍や本格的な論文とでは段落の意味合いが違うので、3つの段落にまたがることもある。この予備知識は重要。
- (4) 少しでも恐竜絶滅説を知っていれば、常識で答えられる設問。

【全訳】進化に関して数少ない予測可能なことの一つが、予測は不可能だということ[予測不可能性]である。どの恐竜が、自分の足元で戯れる小さな生き物の子孫がやがて自分にとって代わることになるかと推測できただろうか。また、遺伝子的にはほとんど区別のつかない同種の生き物が絶滅の危機に瀕している間に、ごく普通の霊長類の一種が最も数の多い哺乳動物のひとつになることを、わずか3万年前にどうして予測できただろうか。

進化の日和見主義的性質----予期せぬことに対処する進化の能力----は、政治の場合とまったく同様に、次に何が起こるか推測するのはほとんど不可能であることを意味している。

もちろん、推測しようとする多くの試みがなされてきた。文学的価値の点では異なる作家たちによってなされてきた、人類の未来に関する予言の多くが、進化に関するラマルク的な考えを伴っている。さかんに使われる器官は大きくなり、もはや不要な器官は消失するという考えである。

それほど仰々しく(描かれてい)ないユートピアにも、X線を知覚できる視力を持つ

ていたり、脳がコンピュータであったりする子孫が登場する。しかし、私たちに何か確信できることがあるとしたら、それは、(1) 人間は超人間にはならないだろうということだ。私たちは、常にそうであるが、新しい進化のスタートを切るというよりはむしろ、現在の弱点に基づいて物事を進めていくことになるだろう。未来を形作る変化のメカニズム[仕組み]が、現代の人間を作った変化のメカニズム(と同じ)であることは間違いないだろう。

未来を予言しようとする生物学者たちは常に、生物学者自身によってか、あるいは――さらに悪いことに――私たちの生物学的無知の深さを信じることのできない政治家たちによって、真に受けられるという致命的な[恐ろしい]危険を冒すことになる。初期の人間の遺伝学は、遺伝的に欠陥のある個人の生殖を阻止しなければ私たちを待ち受けている運命に関して、強い(しかもまったく不当な)確信に満ちた見解を述べたことによって、損なわれてしまった。

優生学運動に由来する考えは、ナチスの実験という恐怖をもたらした。そして、これはそれほど広くは知られていないことだが、東ヨーロッパの人々がナチスの実験を免れるのを妨げるアメリカの移民法の制定をもたらしたのだ。それ以来ほとんどの遺伝学者は、自分たちのテーマが持つ社会的意味を論ずることにより慎重になり、またそうしたことを論じる能力に自信を持てなくなっている。それにもかかわらず、人間集団の遺伝学には、私たちの進化論的未来に確実に影響を及ぼす変化が生じている。私たち、少なくとも、そうした未来がどういうものになるのだろうかと思いをめぐらすことはできるのだ。

(2) 進化は、変異、生存競争、そして自然淘汰[選択]を伴う。偶発的な出来事もまた、特に小さな集団においては、重要な役割を果たす。今後1000年の間に、こうした過程に何が起こるだろうか。

変異の量はおそらく増大するだろう。移住、つまり人種のるつぼ状態は、世界の民族の遺伝子が混ざり合って豊かな遺伝子のスープが出来上がり、進化の原料不足は生じないことを意味する。少なくとも西欧では(これは重要な条件である)、今生まれてくる赤ん坊のほとんどが、自分自身が子供を持つまで生存する。したがって、生存は昔ほど競争の度合いが高くない。自然淘汰は、その生存競争を生き残る可能性の遺伝的に受け継がれた相違を意味する[伴う]が、私たちのほとんどが今では自分の遺伝子を子孫に伝えるまで現に生存するのだから、淘汰の度合いは弱まっている。

進化は、小さな孤立した集団では急速に生じるが、そういう場合には、偶発的な出来事が1個の遺伝子の運命を急速に変える可能性があるからだ。そのような集団は今では非常に稀(まれ)であり、もはや隣に住む異性と結婚する人はほとんどいない――自転車の発達は私たちの未来に大きな違いを生じたのだ。

医学が進歩し、環境が改善されたおかげで、私たちの寿命は著しく延びるだろう、人間は不滅になるかもしれない、と楽天主義者はしばしば主張してきた。だが遺伝子の変異がなければ、進化の進行はありえないのだ。

気の滅入ることだが、(3) 少なくとも西欧の社会では、私たちはすでに人間の寿命増大の限界に到達したかもしれないように思われる。過去数百年間の主な死亡の原因は伝染病であった。しかしながら、公衆衛生の進歩が寿命[余命]に劇的な影響を及ぼした。合衆国では、平均寿命は、20世紀の間に47歳から75歳まで上昇した。

伝染病はほぼ制圧され、今ではガンと心臓病が主な死亡原因の仲間入りをしている。こうしたも病は、もちろん、喫煙や食生活のような外的な要因によって影響を受ける。

しかし、こうした病気を制圧しようという最近の試みは、寿命にほとんど影響を与えていない。大人の余命は、この10年間ほとんど延びていない。たとえば、65歳の女性の平均余命は、1989年には18.6年だったが、これは1979年とまったく同じである。

どうやら、私たちの肉体的過程の、遺伝子によってプログラムされた必然的な衰えによって決まる限界年齢にまで達する人間が、今は昔よりもはるかに多くなっているように思われる。そして、すでに子供を生んでいる[すでに生殖行為を終えている]人や、親族の維持に貢献できない人に対しては、淘汰が有効に作用する度合いがはるかに低いので、私たちの寿命が延び続ける可能性はありそうもない。

私たちは進化の道程の終わり[進化の最終段階]に近づいている、つまりユートピアに限りなく近づいているということさえあるのかもしれない。(4) しかし恐竜のことを忘れてはならない。

次の文章を読み、問1から問6の設問に答えなさい。なお、本文中に*の印が付いている語彙については本文の後ろに注があります。(高3 SA 2003年 千葉・前期)

Forgetfulness, as Plutarch says, “transforms every occurrence into a non-occurrence.” His view is based on the common assumption that memory is an organ of perception into the past, much as the eyes and other senses are organs of perception into the present. As such, it counts as a source of knowledge, connecting us with previous events by the traces they have left in our minds. For *proponents of this view, the *causal links between originating experiences and present memories form a bridge to past time. The promise of this view seems great, because there are no other comparable roads into the past; all the documents and *remains used as evidence by historians are things that exist in the present, and their meaning is often vague.

Unfortunately, to regard memory as a source of knowledge is risky. Memories occur in the present, just like the historians’ documents, and genuine memories are often indistinguishable from mistaken ones or from mere imaginings. There is no contradiction in regarding a given mental experience as a memory, without having a reliable connection between it and a past event. It is impossible to confirm a memory fully, because it is impossible to set the memory side by side with the event that may have caused it, thus testing its accuracy.

(1) Even genuine memories can be unreliable; no good court of law accepts the *uncorroborated recollections of a witness as conclusive. Support from the memory of someone else might help, but only to a limited degree; for memory is subjective, and as the police know to their frustration, two witnesses to the same event can give very different accounts of it. Memories can change, adding and losing details, distorting out of shape under the pressure of time.

Although memory is an unreliable source of knowledge about the past, its role both in intelligence and self-identity is unquestionable. Intelligence *crucially involves memory; inability to make use of acquired information and past experience is a severe limitation on performance of mental and practical tasks alike. Similarly, memory is crucial to self-identity; when a person suffers memory loss, one of the most distressing results is loss of (2) the sense of self. On some views, what makes a person the same person through life is the accumulating set of memories he carries with him. When these are lost, he ceases to be that person and becomes someone else, new and as yet unformed.

And yet it seems that (3) too much memory is equally bad. In his story “Funes the Memorious” Jorge Luis Borges describes the agony of an individual who can forget nothing, and who is tortured by the burden of complete recall. In a *prescient remark made just before the *Holocaust, Sholem Asch wrote, “Not the power to remember, but its very opposite, the power to forget, is necessary to our existence,” a truth later acknowledged by many survivors as an important part of the healing required before the proper work of remembering could begin.

Aeschylus called memory “the mother of the *Muses,” giving it thereby the role of foundation of all the arts. The Greeks sometimes called the Muses “Mneiai,” which means “the Remembrances.” In this sense memory is not individual recollection but collective tradition, and Aeschylus’s point is that without tradition in this sense there would be no literature or music, no history or science, for all these pursuits are *cumulative, depending for their progress on lessons learned and mistakes corrected beforehand. That is one reason why history, as the attempt to achieve an agreed collective memory — a tradition — is so important; (4) without an understanding of the past, we are always in danger of reinventing the wheel, sometimes in any shape but round.

Tradition differs from individual memory in one very important respect: the latter can be true or false, but the former is neither — it just is what it is.

(注) アルファベット順

causal link 因果関係 crucially 決定的に cumulative 蓄積する
Holocaust ナチスによるユダヤ人大虐殺 Muses 芸術・学問の女神たち
prescient 先見の明のある proponent 提唱者
remains 遺物, 遺跡 uncorroborated 裏づけのない

問1 第一段落(Forgetfulness … vague.)で述べられている, 記憶と視覚の役割の違いについて日本語で説明しなさい。

問2 下線部(1)の理由を日本語で述べなさい。

問3 下線部(2)とほぼ同じ意味の内容を表す英語を本文から抜き出して, そのまま書きなさい。

問4 下線部(3)の too much memoryは何と対比されているか, 本文から抜き出して英語で書きなさい。

問5 下線部(4)を日本語に訳しなさい。

問6 次の英文は本文の要約である。①から⑥のそれぞれの空欄に, 本文から最も適切な一語を抜き出して入れなさい。

Memory is thought to be a source of (①) but as such, memory can be (②). However, memory plays an important role in (③) and self-identity. On the other hand, the power to (④) is necessary, too. In contrast to individual memory, memory as (⑤) is also important as the foundation of all the (⑥).

※41で取り上げた問題とは異なる意味で難解なパッセージである。ある分野の背景知識や予備知識があれば読むのに苦労しないという類の文章ではない。テーマは「記憶」だが, 現国つまり母国語の問題であればともかく, 英語(外国語)で読まされると, 日本の大学受験英語のレベルの高さを改めて思い知らされる。しかし本文を細部に渡って正確に読み取ることを求められているわけではない。限られた時間でそれが出来るのは, 教える側の人間の一部分である。あくまでも設問に答えることに拘って読んでいけばよい。

ただし, 量的には穏当であり, 設問も本格的な記述一辺倒ではない。適切な解答法(通用するテクニック)を身につけていれば, それなりの正答率を出すことは可能である。なお, 本問のタイプの設問の解答にも慣れておきたい。

問 1

解答例 1 記憶は過去を認知するもの[器官]であり、(一方,)視覚は現在を認知するもの[器官]である。

解答例 2 記憶は過去を知るためのものであり、(一方,)視覚は現在を知るためのものである。

問 2

解答例 1 記憶は主観的なものであり、時間が経つにつれて細部が変化していくから。

解答例 2 記憶は時間と共に形が崩れて、細部が正確でなくなることがあるから。

問 3 self-identity

問 4 memory loss

問 5 全訳下線部参照

問 6 ① knowledge ② unreliable ③ intelligence ④ forget ⑤ tradition

⑥ arts

【解説】

問 1 第一段落第 2 文の that 以下に述べられていることがそのまま答えになる。

問 2 「本物の記憶でさえ信頼できないことがある」理由はこの段落の第 2 文以下に述べられているが、それをまとめたのが最後の文である。

問 3 self という語を手掛かりにすれば、同じセンテンス内に self-identity が見つかる。

問 4 この段落が And yet 「しかし」で始まっていることから、too much memory と対比されるものは前の段落にあると考える。memory をキーワードに、同じ名詞表現で反対の意味を表すものを探す。

問 5 with, without という前置詞はいろいろな接続詞の意味を兼ねることがある。仮定法で用いる without が if の働きを兼ねるのは、あくまでもその一例にすぎない。この下線部で訳しにくいのは sometimes 以下だろう。この部分は副詞と副詞句(とその一部を構成する形容詞句 but round round=名詞)であり、文構造上はもちろん、意味上も、取り去って著しく文意が変わるわけではない。時間を費やしておかした訳をするよりは省いて訳すのも必要なテクニックである。何点減点されるかはわからないが、そなりの得点は可能である。

問 6 要約文である以上、空欄に入る語は、ほぼ ①-⑥ の順で本文に出てくるはずである。要約文に与えている語句が本文中に出てくる箇所をスキャンしながら空欄を埋めていけばよい。本文を二度通読する余裕などまずないので、他の設問と並行して処理していくことになる。

(全訳は次ページ)

【全訳】プルタルコスが言うように、忘却は「あらゆる出来事をなかったことにする」。彼の考えは、目やその他の感覚が現在を認知する器官であるのとほぼ同じように、記憶は過去を認知する器官であるという一般的な想定に基づいている。記憶は、それ自体、知識の源として重要であり、以前の出来事が私たちの心に残した痕跡によって、私たちをそうした出来事と結びつける。このような考えの提唱者にとって、元々の経験と現在の記憶との因果関係が、過ぎ去った時への架け橋となる。こうした考え方が大いに有望に思われるのは、この考え方に匹敵する、過去に通じる道が他にないからだ。歴史家が証拠として利用する文書や遺物はすべて現在、存在しているものであり、そうした文書や遺物の意味は曖昧であることが多いのだ。

残念ながら、記憶を知識の源と見なすのは危険である。記憶は、歴史家の証拠文書とまさに同じように、現在、生じるものであり、本当の記憶は、誤った記憶や単なる想像と区別がつかないことが多い。頭の中にある、ある特定の経験と過去の出来事との間に信頼できるつながりがなくても、そうした経験を記憶と見なすことに矛盾はない。記憶を完全に確認することは不可能なのである。というのも、記憶とその記憶を引き起こしたかもしれない出来事を突き合わせ、そうやって、その記憶が正確かどうかを調べるのは不可能だからである。

(1) 本当の記憶ですら信頼できないことがあります。まともな裁判所は、裏づけない、証人の記憶を決定的な証拠として認めることはない。他の誰かの記憶による裏づけが役立つこともあるかもしれないが、ある限度までである。なぜなら、記憶は主観的なものであり、警察は分かっているが[ように]、同じ出来事の二人の証人が著しく異なる証言をすることもありうる。記憶は、時間という圧力を受けて形が崩れ、細部を追加したり失ったりして、変化しかねないのだ。

記憶は過去に関する知識の源としては信頼できないが、知力と自己同一性の両者における役割には議論の余地はない。知力には記憶が決定的に関わっている。獲得した情報や過去の経験を活用できなければ、精神的な課題にとっても実際的な課題にとっても達成する際の重大な制約となる。同様に、記憶は自己同一性にとっても決定的に重要である。人が記憶喪失に陥るとき、最も痛ましい結果のひとつは、(2) 自己意識[自我の意識]を失うことである。一部の(人たちの)考え方によると、ある人が一生を通じて同一の人物である根拠は、その人が持っている一連の記憶の蓄積なのである。こうした記憶が失われると、その人はその人物であることをやめて、新しい、まだ形成されていない別の人間になるのだ。

しかし(3) 記憶が多すぎるのも同じく好ましくないように思われる。『記憶の人、フネス』という小説の中で、ホルヘ・ルイス・ボルヘスは、何ひとつ忘れることができず、完全に思い出すことの重荷に苦しめられる人間の苦悩を描いている。ホロコースト直前に表明した先見の明のある所見の中で、ショウレム・アッシュは「思い出す能力ではなく、その正反対のもの、つまり忘れる能力が、私たちの生存に必要である」と書いたが、これは、思い出すという作業を適切に始められるようになるまで必要だった癒しの重要な部分であると、後にホロコーストの生存者の多くが認めた真理であった。

アイスキュロスは記憶を「芸術・学問の女神たちの母」と呼び、それによって、記憶にあらゆる芸術の基盤の役割を与えた。ギリシャ人はときに芸術・学問の女神たちを「ムネイアイ」と呼んだが、これは「回想」を意味する。この意味では、記憶は個人の回想ではなく集団的伝統であり、アイスキュロスが言いたかったことは、こうした意味での伝統がなければ、文学や音楽も、歴史や科学も存在しないだろうということだ。なぜならこうした営みはすべて蓄積していくものであり、その進歩は、教訓を学ぶかどうか、そして誤りを前もって訂正するかどうかにかかっているからだ。このことは、歴史が、合意された集団的記憶----つまり伝統----を獲得する試みとしてたいへん重要なひとつの理由である。(4) 過去を理解しなければ、私たちは常に、車輪を、ときには(どのような形であれ)円形以外の形で、再発明することになるおそれがある。

伝統は、ひとつの非常に重要な点で個人の記憶と異なっている。後者は本当のこともあれば間違っていることもあるが、前者はそのどちらでもない----現に在るがままのものである。

以下の英文は、BBC の特派員である John Simpson の著書 *News from No man's Land* (2002) からの抜粋である。これを読んで、次の問題に答えなさい。〔星印*のついた語句には脚注がある〕(高3 SA 2005年 慶応・文)

- (I) 下線部(1)を日本語に訳しなさい。
 (II) 下線部(2)を日本語に訳しなさい。
 (III) 下線部(3)を日本語に訳しなさい。
 (IV) 下線部(a) worse をより具体的に説明する場合、最もふさわしいものを以下のうちから選び、その番号を答えなさい。
 1. Stories are worse 2. The situation is worse
 3. Worse changes are made 4. Worse for wear 5. Some problems are worse
 (V) 下線部(b)は具体的にどのような人々のことか。20字以内の日本語で説明しなさい。
 (VI) 下線部(c)は何を指すか。本文中の英語で答えなさい。
 (VII) 次の日本語を英語に訳しなさい。
 電子メールのやりとりにおいて肝心なのは、丁寧に体裁が整っていることよりも、迅速かつ簡潔に返信することである。
 (VIII) 著者は、テレビ番組において認められる 'dumbing down' の現象をいくつか指摘している。具体例を挙げながら、それらを100字以上120字以内の日本語で説明しなさい。

My first appearance on network television came in 1977, when I had just started as a radio correspondent in South Africa. I was extremely nervous about this first experience of mine. I prepared for it endlessly, learned my words to perfection, sat on a high stool and stared sincerely into the camera. That camera lens, until you come to like it and it comes to like you, can be a very off-putting object indeed. I was duly put off; but the report had to be delivered live, and there was no autocue: just me, my memory, and the camera lens.

I got through it. I'm not sure how good it was — not very good at all, I imagine, though I tried not to display any of the obvious signs of nervousness: no drying-up, no flickering of the eyes, no shaking in the voice. Afterwards I rang the editor and asked him, with the kind of quaver I had managed to keep out of the broadcast, if it had been all right. (1)

'Fine,' he answered. 'One minute, twenty-seven.'

'No, I really meant the content.'

There was a slight pause.

'Yes — one minute, twenty-seven,' he said.

In a way, I suppose, it was a compliment. He assumed that the content would be fine anyway; only the length was in question, and since I had been asked to provide a minute and a half, there was nothing much else to talk about.

The fact that so many news items come in at the last minute is the clearest indication imaginable that there is no heavy editorial hand at work in the BBC. In Soviet television in the distant past a correspondent would have satellited the report a good two hours early, so the news editor of the day could watch it and order any cuts that might be necessary. The correspondent would also have telexed or faxed the script well in advance, so that it could be examined for any heresies or inaccuracies which would get everyone into trouble. Only after an editorial committee had examined the script from all angles would the word go out to the correspondent to proceed.

Which is, depressingly, precisely what happens today with American television network news. One or two favoured and much-trusted correspondents are allowed to write their scripts as they choose, and send over their edited report to New York without all the preliminaries. The rest have to email their

scripts well beforehand. That, in a fast-moving business like television news, can be a real problem. You always hear stories about how the editorial committee has sat on a script for hours, then announced it wants major changes when there is almost no time left to make them. (2)

Worse(a), it means that a team of people who are sitting in New York, and know nothing of conditions in Baghdad or Belgrade or Kabul apart from what they read in the newspapers and see on television, presume to dictate to the person on the ground how he or she should describe events there. It is the precise opposite of reporting; it means that everyone involved is drawn into that dreary, mindless round by which the same few facts and impressions are cycled and recycled around the system, regurgitated in homogenized form and specially pre-digested so as not to challenge the audience's expectations or understanding in any way.

An American producer I know was once working on a report from London about marriage. She had written the script for her correspondent and included the word 'matrimony' in it. She emailed it to New York at about five in the afternoon, London time. At nine o'clock she had a phone call from the foreign desk in New York, insisting that the word 'matrimony' be dropped from the script in favour of 'marriage'.

'Nobody uses words like that,' said the foreign editor reprovingly. 'You've got to use words that people can understand.'

And not just words, but concepts they can understand. Nothing difficult. Nothing out of the ordinary. Nothing which makes them pause to think. The United States, thanks to the effect of appealing to the lowest common denominator(b), is turning into a nation unaware of its own or anyone else's past, ignorant of its own or anyone else's present. It is an ugly and shameful betrayal by the very people who should compete the most in bringing the world to the American viewer: the managers who control the television networks. Instead, they have persuaded the American viewer that the world is of no account.

The big network news programmes in the early evenings often nowadays contain large numbers of prearranged features, most of them about aspects of life in the United States. The events that are happening in the world around them often seem of less significance than the carefully packaged items about health and insurance and old-age homes: each the result of research among focus groups* and target areas of the population. The fundamental business of explaining to people what has gone on in their world today, the task that Ed Murrow and Walter Cronkite* recognized as being fundamental to their function in life, has long been set aside. Instead, 'reality TV' has taken over.

The desire to know what is happening, which is present in all of us, has been transferred from the complicated world of real life to the stripped-down, easy-to-understand issues of a fireman's or a policeman's or a fighter pilot's or a nurse's life. We watch them facing real fires, real criminals, real targets, real emergencies, and we feel we have seen the real world. The complexity of real life is varnished over and smoothed down yet again. It ceases to be real life at all; it's reality as entertainment, easily digested, lacking in roughage. You know the outcome before you switch the programme on.

It's infotainment: empty, silly, meaningless perhaps, but it's what focus groups say they like. What else can they say, when they don't have anything better to watch?

The word(c) may sound antiquated, Reithian*, imperialist, arrogant in our ears, and it is rarely used nowadays; but the broadcasters in any society have a duty to fulfil. They have access to all the information in the world, and it is their duty to pass it on faithfully to their audiences. But television executives have grown up in an environment where it is acceptable to mould

reality. (3)

And so, in a world where people always seem to feel the news is likely to be bad, there is a temptation to create a little good news, touching up the facts and encouraging positive, happy, cuddly events to take place. Once you begin this process, there is no end to it. If the eighteenth-century playwright Nahum Tate could rewrite *King Lear* to give it a positive ending*, why should we not rewrite the news as people tell us in the focus groups that they would like it to be: Prince Charles happily married to Princess Diana, Osama bin Laden marched in chains through the streets of New York?

The enemy of proper information and good reporting is not stupidity but insipidity. The men and women who work on the US networks are intelligent, able, competitive people; but the context within which they are obliged to work is a Nahum Tate one, where the viewer must not be stretched or challenged. The system makes these things very hard indeed to change; and the system which obtains in American television news — the domestic variety, certainly — discourages difference and hard thinking, and encourages homogeneity and conventionality of thought.

Broadcasters have constantly to defend themselves against the dumbing-down charge, and that is good for them. It means that the central issue in news broadcasting is always the quality of what is broadcast. Like the geese on the Capitol, a lot of the complaints are just imitative hissing and cackling; yet when the time comes and the barbarians are finally getting ready to storm the city's heights, there is a respectable chance that the hissing and cackling will awaken the citizens*. That's the hope, anyway.

'Dumbing down' is usually taken to mean the process by which television becomes ever more stupid.

Maybe this is true for entertainment programmes, but it isn't the main problem in news. There, the real enemy isn't so much stupidity as slickness of presentation, which irons out the detailed and interesting in favour of the bland and unexceptionable. Form takes over from content, and all that counts is presentation. Of course presentation is important: if it's clumsy and amateurish, the quality of the reporting becomes obscured. But appearance isn't everything. There has to be some substance somewhere. This substance must be united with the art of television presentation; without the art, the substance isn't much use. More than one famous expert has been brought into television from the real world, has stared into the camera and barked gruffly at it a few times, then disappeared forever. 'The face for radio and the voice for newspapers' isn't just a broadcasting joke, it's a warning. You don't have to be beautiful to appear on television, God knows: if that were true, few of us would ever have made it. But you have to have a certain liking for the camera, and a certain appreciation of why it is there and what it wants. And the camera has to reciprocate.

*Focus groups are small groups of people used for market research.

*Edward R. Murrow (1908-65) and Walter Cronkite (1916-) are two of the most famous names in the history of US broadcast journalism; they both worked for CBS.

*Sir John Reith (1889-1971), the first director-general of the BBC, believed that the mission of television broadcasting was to educate and improve the audience.

*Nahum Tate (1652-1715) was an Anglo-Irish poet and playwright who rewrote several of Shakespeare's plays; his version of *King Lear* (1681) was preferred to Shakespeare's original play for a century or more.

*A reference to the story of how geese alerted Roman soldiers to an attack by barbarians on the Capitol of Rome, here used to suggest complaints directed at the media by US politicians on Capitol Hill in Washington, D.C.

【解答】

- (I) そのあと、私は編集者に電話をして、放送中はなんとか抑えていた震えるような声で、あれで良かったかどうかと尋ねた。
- (II) 編集委員会が原稿を何時間もかけて調べ、そしてそうする時間はほとんど残っていないのに、重大な変更[大幅な修正]を求めると告知したといった話を、いつも聞かされる[耳にする]。
- (III) テレビ局の重役たちは、現実を型にはめて作ることが容認される環境で育ってきた(のだ)。
- (IV) 2
- (V) 言葉や概念を理解する力が最も弱い人々。(19字)
難しい言葉や概念を理解しにくい人々。(18字)
- (VI) duty / a duty to fulfil
- (VII) What is important in exchanging e-mails is replying quickly and briefly rather than being polite or proper in form.
When you communicate by email, you should keep in mind that writing back quick and brief messages is more important than writing them politely and in proper form [...than paying attention to politeness and the proper form].
- (VIII) matrimony のような少しでも難しい単語や概念を排除し、ニュース番組で世界の出来事の代わりに国内の問題を特集し、また複雑な現実の生活を分かりやすくして娯楽に変えるなど、(報道ではなく、)視聴者に迎合した中身の無い(情報)娯楽番組を放送する(愚民化の)こと。(108-120字)

【解説】

- (I) ...and asked him if it had been all right. と続くことは容易に見抜けるだろう。あとは with the kind of quaver (which) I had managed to keep out of the broadcast, つまり関係代名詞の省略がわかればよい。keep out of the broadcast の訳は文脈から考えることになるが、自然な日本語であれば訳語の幅は広く認められはらずである。
- (II) 辞書持ち込み可である以上、sit on の意味は当然確認しなければいけない。構文的には、then (it has) announced (that) it wants ... (it=the editorial committee) であり、when 以下の副詞節が (has) announced にかかることと、最後の make them=make the major changes がわかればよい。構文が掴めていれば、少し訳文に工夫は要するが、大きく減点されることはない。この辺りまでは、このパッセージはけっして難しくない。
- (III) 本文全体は相当読み辛くなっているが、この下線部和訳は mould の意味さえしっかり掴めればかなり平易である。
- (IV) Worse, ... =What is worse, ... 「さらに悪いことに(は)」で、文中での働きは副詞である。More important, =What is more important, と同じ。落とせない設問。
- (V) 下線部(b)の語句は denominator を辞書で調べる。詳しい説明はまず載っていないが、前の段落とこの段落内の記述からおおよそ見当がつくはずである。
- (VI) The word と定冠詞が付いているので、前出の語と思い込むと答えようがなくなる。word が単数形なので duty と答えた場合と a duty to fulfil と答えた場合の採点がどうなるかは微妙なところ。(この項補足)
- (VII) email という語が動詞として出てくるだけで、本文中の表現は参考にならない。一般によほど大きくないと和英辞典はそれほど役に立たないが、英和辞典での確認を怠らなければ十分戦力になる。辞書でカバーし切れないのは「体裁が整っている」だけだろう。英作文で最も大切なのは、やはり和文和訳の力である。やや難。
- (VIII) dum down の意味が分かれば、具体例はこのイディオムが出てくるかなり前から挙げられていることに気づくが、携帯用の辞書には載っていない。英和は語彙の豊富なものを用意したい。合否を分ける可能性もある。あとは背景知識が物を言う。

【全訳】私が初めてネットワークテレビに出演したのは1977年で、ラジオ局の南アフリカ通信員として働き始めて間もない頃だった。私はこの初めての体験に神経過敏になっていた。この初出演に備えて際限なく準備をし、自分のセリフを完璧に覚え、高いスツールに腰掛けて、真剣にカメラを見つめていた。あのカメラのレンズは、人がレンズを好きになり、レンズが人を好きになるまでは、非常に人を当惑させる物だ。私も大いに当惑したが、レポートは生放送で伝えなければならず、しかも（セリフを大きく写す）オートキューはなかった。あるのは自分と自分の記憶とカメラのレンズだけだった。

私はレポートを終えた。それがどれくらいの出来だったのかわからない----けっして上出来ではなかったと思うが、あがっていることを示す明らかな気配はいっさい見せないようにした。言葉に詰まったり、頻繁に瞬きしたり、声が震えたり、といったことである。そのあと、私は編集者に電話をして、放送中はなんとか抑えていた震えるような声で、あれで良かったかどうかを尋ねた。(1)

「上出来だ」と彼は答えた。「1分27秒だ」

「いや、内容のことを言っているんですが」

ちょっと問があった。

「ああ----1分27秒だ」と彼は言った。

ある意味で、それは褒め言葉だったのだろう。彼は、いずれにしても内容は大丈夫だろうと思っていたのだ。長さ[時間]だけが問題で、私は1分半話すよう言われていたので、他に話すことはほとんどなかったのだ。

非常に多くのニュースが土壇場になって入ってくるという事実は、BBC では大幅な編集作業はしていないことを、考え得る限り最も明確に示している。かなり昔のソビエトのテレビでは、通信員はレポートを2時間も前に衛星中継していただろう。だから、その日のニュースの編集者は、それを見て必要と思われるカットを命じることができたのだ。通信員はまた原稿をかなり事前にテレックスやファックスで送っていただろう。だから、全員を問題に巻き込むことになる異端的な内容や間違いがないかを調べることができた。編集委員会が原稿をあらゆる角度から吟味したあとで初めて、通信員に先に進めろという指示が出されたものだ。

気の滅入ることだが、それはまさに今日、アメリカのネットワークテレビのニュースに起こっていることだ。好かれて大いに信頼されている一、二の通信員は、自分の好きなように原稿を書いて、自分で編集した記事を事前作業はいっさいなしでニューヨークに送ることを許されている。残りの通信員たちは、かなり前もって自分の記事をEメールで送らなければならない。テレビニュースのような動きの速い業界では、これは大きな問題になりかねない。編集委員会が原稿を何時間もかけて調べ、そしてそうする時間がほとんどなくなってから、重要な変更[大幅な修正]を求めると告知したといった話を、いつも聞かされる[耳にする]。(2)

さらに悪いことに(a)、それは、ニューヨークにいて、新聞で読んだり、テレビで見たりしたこと以外はバグダッドやベオグラードやカブールの状況を何も知らない人たちのチームが、そこで起こっている出来事をどのように描写するかを、現場にいる人間におこがましくも指図することなのだ。これは報道とは正反対のことである。つまり、関係者全員が退屈で無意味な作業の繰り返しに引き込まれ、この繰り返しによって、少数の同じ事実と印象がテレビニュースで何度も反復され、そして視聴者の期待や理解を喚起することがいっさいないように、同質化された形で繰り返され、意図的に分かりやすくされることになる。

私の知っているあるアメリカ人プロデューサーは、かつてロンドンから結婚についてレポートする仕事に取り組んでいた。彼女は通信員のために原稿を書き上げていたが、原稿には“matrimony(結婚)”という言葉が含まれていた。ロンドンの時間で午後5時頃、彼女は原稿をニューヨークにEメールで送った。午後9時にニューヨークの外信部のデスクから、“matrimony”という言葉をやめて“marriage”を使うように要求する電話を受けた。

「誰もそんな言葉は使わない」と外信部の編集者は咎(とが)めるように言った。

「人が分かる言葉を使わなくてはいけない」

そして言葉だけではなく、人が理解できる概念もである。難しいものはだめ。普通でないものはだめ。人に改めて考えさせるのはだめ。最小公分母(b)に受けようとしてきた効果のおかげで、アメリカ合衆国は、自国あるいは他のどの国の過去も知らず、

自国あるいは他のどの国の現在にも無知な国になりつつある。それは、世界をアメリカの視聴者に知らせる上で最も競い合わなければならない、まさにその人間たちによる醜く恥ずべき裏切り行為である。テレビのネットワークを支配する幹部たちのことである。それどころか、彼らはアメリカの視聴者に、世界は重要ではないと信じ込ませてきたのだ。

夕方の大手ネットワークのニュース番組は、最近しばしば、多くの前もって準備された特集を放送するが、その大部分はアメリカ国内の生活の局面に関するものである。そうした生活の局面の周りで起きている世界の出来事が、健康と保険や老人ホームに関して入念にまとめられた番組ほど重要ではないように思われることがよくある。それぞれの番組[テーマ]が、フォーカス・グループ(語句の脚注参照)やターゲット・エリア[目標地域]の住民を調査した結果だからだ。人々に自分の世界でいま何が起きているかを説明するという基本的な仕事、エドワード・マロウやウォルター・タロンカイトが彼らの人生の役割にとって基本的なことだと認識していた課題は、もう長いこと脇に退けられている。代わりに、「リアリティー・テレビ」が登場した[取って代わった]のだ。

何が起きているか知りたいという願望は、私たちの誰もが持っているものだが、その対象は現実の生活という複雑な世界から、余分なものを取り除いて分かりやすくした、消防士や警察官や戦闘機のパイロットや看護師の生活の問題に移し変えられている。私たちは、彼らが現実の火事や現実の犯罪者や現実の標的や現実の緊急事態に立ち向かう姿を見て、現実の世界を目の当たりにしたのだと感じる。現実の生活の複雑さは上辺(うわべ)に粉飾を施され、そしてさらにもう一度滑らかに[取りつきやすく]されている。それはまったく現実の生活ではなくなっている。それは分かりやすく、歯ごたえのない、エンターテインメントとしての現実である。番組のスイッチを入れる前から結果は分かっている。

それはインフォテインメント(情報娯楽番組)である。中身がなく、ばかばかしく、おそらく意味がない。しかしフォーカス・グループは、そういう番組が好きだと言う。もっとまじな見るべき番組が何もないとき、彼らは他に何と言えるだろうか。

その言葉[次の言葉](c)は私たちの耳には、時代遅れで、ジョン・リース風で、帝国主義的で、傲慢に聞こえるかもしれないし、今ではめったに使われることもない。しかしどんな社会であっても、報道に携わる人間には果たすべき義務がある。彼らは世界のあらゆる情報にアクセスでき、したがって、それを正確に視聴者に伝えることが彼らの義務である。しかし、テレビ局の重役たちは、現実を型にはめて作ることが容認される環境で育ってきたのだ。(3)

だから、ニュースは悪いニュースになりそうだと常に人々が感じているような世界には、事実には手を加え、前向きで、楽しく、喜んで受け入れたいくなる出来事が起こるように仕向けて、少しばかり良いニュースを作り上げようという誘惑が存在する。いったんこのプロセスを始めると、際限がなくなる。18世紀の劇作家ネイハム・テイトが『リア王』を書き変えてハッピーエンドに出来たのだとしたら、ニュースをフォーカスグループの人々の好みに合うように書き変えて何が悪いのか。チャールズ皇太子がダイアナ妃と幸福な結婚生活を送り、オサマ・ビン・ラディンが鎖につながれてニューヨークの街を引き回されて何が悪いのか。

正しい情報と適切な報道の敵は、愚かしさではなく、陳腐さである。アメリカのネットワークで働く男女は、知的で有能で競争意識のある人々だが、彼らが仕事することを余儀なくされている状況は、ネイハム・テイト的な状況であり、視聴者を緊張させたり、試したりすることは許されないのだ。制度上、こうしたことを変えるのは非常に難しく、そしてアメリカのテレビニュース----もちろん国内放送----で普通に見られる[定着している]この制度は、他人と異なることや、真剣に考えることを妨げる一方、同質性や型にはまった物の考え方を助長する。

放送に携わる者は、番組を愚劣なものにし[番組のレベルを下げろ]という要求に対して絶えず守りを固めていなければならないが、それは彼らにとって良いことである。つまり、ニュース放送の中心的な問題は常に放送される内容の質だということの意味しているからだ。議会のガチョウたち[馬鹿者たち]のように、苦情の多くは、人の真似をして野次を飛ばし、鳴き声を挙げている[無駄口を聞いている]だけである。しかし時が来て、野蛮人たちがついに市の高台を攻撃しようとしているとき、その鳴き声が市民の目を覚まさせるそれなりの可能性はある。いずれにしても、そうあつ欲

しいものだ。

「愚劣化」とは通常、それによってテレビがますます愚劣になる過程を意味すると考えられている。たぶん、これは娯楽番組には当てはまることだが、ニュースでは主要な問題ではない。ニュースでは、本当の敵は愚劣さよりもむしろプレゼンテーション[表現]の巧妙さであり、当たり障りのない、批判の余地がないものにするために、表現の巧みさによってニュースの細部や興味深い点が均(なら)されてしまうのだ。形式が内容に取って代わり、表現方法だけが重要になる。もちろんだら表現するかは重要である。表現がぎこちなくて未熟であれば[素人臭ければ]、報道の特質がぼやけてしまう。しかし、外見がすべてではない。どこかに本質的なもの[中身]がなければならない。そして、この中身はテレビの表現技術と一体にならなければならない。この技術がなければ、中身は大した役に立たない。有名な専門家が現実の世界からテレビに連れて来られ、カメラを覗き込み、数回カメラに向かって荒々しく吠え、そしてテレビから永遠に姿を消すということは何度もあった。「ラジオ向きの顔と新聞向きの声」は、単なる放送業界の冗談ではない。警告である。テレビに出るために美形である必要はない。間違いない。もしそれが本当だとしたら、私たちのほとんどがテレビに出ることはけっしてなかっただろう。しかし、(テレビに出る以上は)ある程度はカメラを好きにならなければならないし、そしてなぜカメラがそこにあり、何を望んでいるのかをある程度は理解しなければならない。そうすればカメラはそれに報いてくれるはずだ。

※本文は読み易いのは最初の方だけで、途中からは内容を正確に読み取るには相当に苦勞する。語彙のレベルが高く、筆者特有の比喩やレトリックが随所に顔を出し、文法的に破格な用法も一部見られる。通常の英文和訳の範囲に止めると、日本語としてかなり読みにくくなる。したがって、翻訳の技術も採り入れて訳してある。全訳を読んでもらえれば、全体の内容は十分に理解できると思うが、英語の語句や文構造と日本語訳とのストレートな対応関係は必ずしも存在しない。

本来は、語句と構文の解説を細部に渡って付けるべきだが、それをすると半端な量ではなくなる。ほぼすべての行に注釈を付けることになるだろう。このパッセージを訳すのに、すでに通常の3-4倍の時間を費やした。受験生としてはあくまでも設問に答える範囲で読み取ればよいので、ひとまずは全訳で納得して欲しい。後日、何箇所かは解説を付すつもりだが、今は割愛させてもう。○本等、色本の過去問集の全訳がどうなっているか時間があれば見てみたいが、失礼ながら、おそらく誤読と誤訳の集積に近いだろう。英文和訳の範疇を超えた英文であり、いままで扱った入試の過去問の中で質・量(注を含めると1700語に及ぶ)共に最も手強いと言ってよい。慶応・文学部で出題される英文がこれほどのものだとは。ただし書かれている内容はほぼ日米に共通するものである。

次の英文を読み、下の設問に答えなさい。(高3 S A 2004年 東京外語・前期)

We humans have evolved into quite strange beings. Whatever happens in the future is unlikely to be more odd than what has already happened in the past. We differ from other animals in that we cook our food and wear clothes. Other unusual traits are unnecessary aggressiveness, and a mild preference for making love face to face. But perhaps the most important distinguishing feature is human language. This extraordinary system allows us to communicate about anything whatsoever, whether it is present, absent, or even non-existent.

Humans are the exception. We are a zoological curiosity, as bizarre in our own way as (1) the hoatzin, a South American bird with a bright blue face, big red eyes and orange crest, which inhabits the Amazon rain forest. Alone among birds, the hoatzin has developed a digestive system similar to that of a cow. We humans are equally strange, because language with its fast and precise sounds has more in common with birdsong than with the vocal signals of our ape relatives.

All primates, the animal “order” to which humans belong, have some overlap in their sound-producing and hearing abilities. But the vocal production of our primate relatives is less informative than was once hoped. A straight comparison between chimp and human vocalizations is limited in what it can reveal. More informative, perhaps, is a comparison with the animal communication system which has most in common with human language: birdsong.

Birds talk, but they do not have “language” as humans understand it. Yet, like humans, they have an ability to make distinctive sounds that is rare in the animal world, even though the method they use to produce them is rather different from that used by humans. But this is not the only similarity between birds and humans. There are several others.

Many birds emit two types of sounds: calls, such as a danger call or a summons call, which are mostly innate, and songs, which often involve learning. Humans also have built-in “calls,” the cries uttered by babies, at least two of which are distinguishable worldwide: a pain cry and a hunger cry. But language itself requires learning, and it exists alongside this old “call” system. Birds and humans therefore share a dual system, with one part in place at birth, and the other acquired later.

In birdsong, each individual note is meaningless, whereas the sequence of notes is all-important. Similarly, in humans, a single segment of sound such as *b* or *l* does not normally have a meaning. The output makes sense only when sounds are strung together. This double-layering provides a further parallel. And in both birds and humans, sound segments are fitted into an overall rhythm and intonation pattern.

As with human languages, the song of a single species of bird may have different but related “dialects.” (2) The white-crowned sparrow, a California resident, has dialects so different, even within the San Francisco area, that someone with a cultivated ear would be able to tell where he or she was in California, blindfolded, simply by listening to their songs. And both birdsong and human language are normally controlled by the left side of the brain, even though the mechanisms by which this control is exercised are quite different.

Young birds have a period of sub-song, a type of twittering which emerges before the development of full song. This is like the “babbling” of human infants who experimentally produce repetitive *bababa*, *mamama* type sequences when they are a few months old. Many birds have to acquire their song during a short “critical period,” when they are young; otherwise they never learn to sing normally. Similarly, humans acquire language best during a “sensitive

period” in the first few years of life.

But (3) some very real differences also exist. Mostly, only male birds sing. Females remain songless, unless they are injected with the male hormone. And considerable variation is found between the songs of different species of birds, more than between different languages. In addition, bird communication is a fairly long-distance affair, compared with the intimacy of human language. Sometimes, the effect can travel over several kilometers, as with the New Zealand kakapo, a flightless parrot which makes spectacular booming sounds, somewhat like the note produced by blowing across the top of a bottle, in its efforts to obtain a mate. These kakapo booming sounds can go on all night, and leave the kakapo in a state of sexual excitement.

A link between language origin and mating has sometimes been proposed. “Language was born in the courting days of mankind. The first utterances of speech, I fancy to myself, were something like the nightly love-lyrics of a cat upon a roof or the melodious love-songs of the nightingale,” suggested a Danish linguist. However, this theory has been attacked. “If our human ancestors used song in sexual advertisement and courtship, more recent selective forces have made such a habit rarer,” was one response to his ideas. Or as still another noted, “As for courtship, if we are to judge from the habits of the bulk of mankind, it has usually been a silent activity.” At the most, perhaps, language was an additional aid. Courtship was not its primary role.

In short, humans use language for many more purposes than birds use song. Birds do not, for example, sing of the beauties of nature or discuss a problem in order to solve it. They do not make puns or jokes, either. Human language can cope with any topic, including imaginary ones. It is unique.

Puzzles abound concerning human language. The similarities between birdsong and human language have led to an important discovery: parallel systems can emerge independently in quite different species. Certain features have apparently proved useful for sophisticated sound systems. Yet [as; as; it; many; observation; problem; raise; solve; this]. The origin of our extraordinary communication system is still a mystery.

1. 下線部(1)のツメバケイ (hoatzin) とヒトは、どのような点で、それぞれの種の「変り種」と考えられるか。70字以内で述べなさい。(15点)
2. 筆者は、ヒトの言語活動のどの側面が、いかなる理由で、トリの地鳴き (calls) とさえずり (songs) に相当すると言っているか。60字以内で説明しなさい。(15点)
3. 下線部(2)を日本語に訳しなさい。(white-crowned sparrow: ミヤマシトド(20点))
4. 下線部(3)の内容を、70字以内で簡潔に書きなさい。(15点)
5. “A link between”で始まる第10段落の内容を、80字以内で要約しなさい。(20点)
6. 最終段落の[]内の語を、必要に応じて語尾を変化させ、文脈に合うように並べ換えなさい。(15点)

※リスニング30点を含む全5問(300点)中、最大の配点(100点)を占める第1問の長文読解問題を取り上げた。

【解答例】

1. ツメバケイはウシと似た消化器系を発達させた唯一のトリで、ヒトは類人猿の音声信号よりトリのさえずりとの共通点が多い言語を発達させたこと。(67字)
2. 幼児の泣き声は生得的なものでトリの地鳴きに相当し、ヒトの言語自体は後天的に学習するのでトリのさえずりに相当する。(57字)
3. 全訳下線部参照
4. トリはオスしかさえずらない。異なる種のトリのさえずりには異なるヒトの言語以上の多様性がある。トリの意思伝達はかなりの長距離に及ぶ。(65字)
5. 言語の起源はヒトの求愛行動にあると言った言語学者もいるが、この考えは批判され、動物の鳴き声と違い、言語は求愛において補助的な役割を果たしただけとされている。(78字)
..... 批判され、人類の習性からして、求愛は言語の主要な役割ではなかったと考えられている。(75字)
6. this observation raises as many problems as it solves

【解説】

「鳥の鳴き声と人間の言語」という少し珍しいテーマについて書かれた文章だが、内容も構文もけっして難解なものではない。一部、語彙のレベルも高く、全訳には苦労したが、設問自体は該当する箇所が指摘されているので取り組み易い。

1. - 4. は、全訳と解答例を見れば(2学期以降の東京外語受験生には)解説は不要だろう。

5. は実質的に短文の要約であり、最も手強い。段落全体の語数と指定の字数からすると、要約問題としては楽なはずだが、キーワードの courting, courtship は知らない受験生のほうが多いだろう。しかし、ネコやナイチンゲールの例からおおよその見当はつくはずだ。ただし、“As for courtship, if we are to judge from the habits of the bulk of mankind, it has usually been a silent activity.” At the most, perhaps, language was an additional aid. Courtship was not its primary role. という記述の内容には反論の余地がありそうだ。

なお if we are to judge from the habits of ... は、通常「意図・目的」を表すとされる if 節中の「be+to不定詞」だが、この用例のように必ずしも「意図・目的」とは限らない。

6. は三単現の s と複数形の s を補うだけの比較的平易な問題だが、as 以下の it solves many problems. の消去が分からなくて出来なかった人は、すでに他でも何度か説明しているが、[英文和訳演習\(英語下線部和訳\)の2](#)を参照。

※150分という試験時間からして、けっして慌(あわ)てる必要はないが、時間が足りないタイプの人、あくまでも設問主体に考えて、適宜、拾い読みのテクニックを身に付けたい。ただし、こうした日本語による記述問題の場合、最後に物を言うのは日本語の表現力、文章力であることを肝に命じて、問題演習を積み重ねてほしい。慶応・文学部や千葉大の問題なども大いに役立つはずである。

(全訳は次ページ)

【全訳】 私たち人間はかなり奇妙な生き物[存在]に進化してきた。将来起こるどんなことも、これまでにすでに起こったこと以上に奇妙だということはありそうもない。私たちが他の動物と異なる点は、食物を調理し、服を着ることである。それ以外の変った特徴は、不必要な攻撃性と、顔を向き合わせた性行為を適度に好むことである。しかしおそらく、最も重要な著しい特徴は、人間の言語である。この並はずれた体系があるから、私たちは、いま存在しても、いま存在しなくても、それどころかそもそも存在しなくても、どんなことについても伝達することができるのだ。

ヒト(人間)は例外(的な存在)である。私たちは動物学的に珍しい生き物であり、鮮やかな青い顔と大きな赤い目とオレンジ色の冠羽(かんう, かんむりばね)を持ち、アマゾンの熱帯雨林に生息する、(1)ツメバケイという南米の鳥と同じくらいに、それぞれ風変わりなのである。鳥類の中では、ツメバケイだけが牛に似た消化器系を備えている。私たち人間が同じように奇妙なのは、速く正確な音を発する言語が、近縁の類人猿の音声信号よりも鳥の鳴き声(さえずり)と共通点が多いからである。

ヒトが属する動物の類[目]である霊長類[目]はみな、発声と聞き取りの能力に共通する部分がある。だが近縁の霊長類たちの発声は、かつて期待されたほど情報を(豊富に)提供していない。チンパンジーと人間の発声をそのまま比べても、明らかになることは限られている。おそらく、より多くの情報を得られるのは、人間の言語と最も共通点の多い動物のコミュニケーションのシステム、つまり鳥のさえずり、との比較だろう。

鳥は話をするが、人間が理解するような「言語」は持っていない。しかし、人間と同じように、鳥には動物界では珍しい特徴的な音を発する能力がある。たとえ鳥が音を発するのに用いる方法は人間が用いる方法とはかなり異なるにしても。だが鳥と人間の類似点はこれだけではない。他にもいくつか類似点がある。

多くの鳥が二種類の音を発する。危険を知らせる鳴き声や仲間を呼ぶ鳴き声などのようなほとんどが生得的な鳴き声(地鳴き)と、多くの場合後天的な学習を伴うさえずりである。人間にも生まれつきの「泣き声」、つまり赤ん坊が発する泣き声があり、そのうちの少なくとも二つは世界中で区別できる。痛みを訴える泣き声と、空腹を訴える泣き声である。しかし言語自体は学習を必要とし、この元からある「泣き声」の系統と一緒に存在している。したがって、鳥と人間は共に二元的な系統を持ち、ひとつは生まれたときから機能していて、もうひとつは後から習得するのである。

鳥のさえずりでは、個々の音に意味はないが、一方、音の連続はきわめて重要である。同様に人間の場合も、通常は b や l など、一つの断片的な音には意味はない。音がつながってはじめて発音が意味を成すのだ。この二重構造がさらなる類似点を生む。そして鳥でも人間でも、個々の音は全体的なリズムとイントネーションの型にはめ込まれている。

人間の言語の場合と同じように、一つの種の鳥のさえずりに、異なっているが関連のある「方言」があることもある。(2)カリフォルニアに生息するミヤマシトドには、サンフランシスコ地域内でさえ、著しく異なる方言があるので、訓練された耳の持ち主なら、目隠しをされていても、その鳴き声(さえずり)を聞くだけで、自分がカリフォルニアのどこにいるのかわかるだろう。また鳥のさえずりも人間の言語も、通常は左脳によって制御されている。こうした制御が行なわれる仕組みはかなり異なっているにしても。

若鳥には、完全にさえずりになるまで、小刻みにさえずりのような、まだ本当のさえずりとは言えない時期がある。これは、生後数カ月のころ、バババ、マママといったような音(の連続)を試しに繰り返して発する人間の幼児の「片言」のようなものである。鳥の多くは、若いとき、短い「決定的な時期」にさえずりを習得しなければならない。そうしなければ、けっして正常にさえずりようにはならない。同様に、人間も生まれてから数年の「敏感な時期」に最もよく言語を習得する。

しかし(3)非常に重要な違いもまたいくつか存在する。ほとんどの場合、さえずるのは雄の鳥だけである。雌は雄のホルモンを注射されない限り、さえずらないままである。また異なる種の鳥のさえずりの違いは、異なる言語間の違いにも増してかなり多様である。さらには、人間の言語の親密さに比べると、鳥のコミュニケーションはかなり長距離に渡る。ときには、ニュージーランドのフクロウオウムの場合のように、その効果が数キロ先まで及ぶこともあり、この飛ばないオウムは、つがいの相手を得ようとして、瓶の口を吹くと出る音に似た、見事にブーンと響く唸り声を出す。フク

ロウオウムが発するこのブーンという唸り声は一晩中続くこともあり、フクロウオウムは性的興奮状態に置かれることになる。

言語の起源と性愛との結びつきはとときどき提唱されたことがある。「言語は人類の求愛時代に生まれた。最初に発した言葉は、夜に猫が屋根の上で歌う求愛の歌か、ナイチンゲールのメロディーの美しいラブソングのようなものだった、と私は思う」と、あるデンマーク人の言語学者は示唆している。しかし、この説は非難されてきた。「もし私たち人間の祖先が歌を性的な誇示や求愛に使ったとすれば、その後で淘汰の力が働いてそうした習慣が稀(まれ)になったことになる」というのが、この言語学者の考えに対するひとつの応えだった。あるいはさらに別の応えが言うように、「求愛に関しては、人類の大半の習性から判断するならば、たいていは無言の活動だった」。おそらく、せいぜい言語は補助的なものだっただろう。求愛は言語の主な役割ではなかったのだ。

要するに、人間は鳥がさえずりを利用するより、はるかに多くの目的に言語を用いる。たとえば、鳥は自然の美しさを歌ったり、問題を解決するために問題を話し合ったりはしない。だじゃれや冗談も言わない。人間の言語は、想像上の話題も含めて、どんな話題にも対処できる。人間の言語は独特なのだ。

人間の言語に関しては謎が多い。鳥のさえずりと人間の言語の類似点は、重要な発見をもたらした。まったく異なる種の生き物に類似した体系(システム)が別々に生じ得るということである。精巧な音声の体系にとって、あるいくつかの特徴が有用であることがどうやら証明されてきたようだ。だがこの意見は、(それが)解決するのと同じくらいに多くの疑問を提起する。私たち人間の並外れた伝達(コミュニケーション)の体系の起源は、依然として謎である。

次の英文を読み、設問に答えなさい。(高3 S A 滋賀)

We cannot tell what is passing in the mind of another by looking directly into that mind, nor can others know what is in our own minds, except by means of some symbol, whether a picture, a statue, a gesture or a sign, or, as in the case of spoken language, by means of certain sounds, which are the outward symbols of what is inward, and of the mind. A symbol stands for something else, and those who are familiar with the symbol and the particular way of using it recognize and understand it. Some symbols, such as pictures or statues, have a meaning for everybody: there is no need to make a special study of them before we can understand them. Thus, a picture of a horse or a tree will at once convey to anyone who has ever seen these objects the idea of 'horse' or 'tree.' But those symbols which are the sounds made by the organs of speech do not possess the same general significance. Therefore, until we have learnt a language, and have found out the meanings which the speakers attach to each particular sound, or collection of sounds — that is, word — we do not understand it; it conveys no meaning to us. For there is no absolute reason why the group of sounds which go to make up such a word as 'horse' should necessarily convey the idea of a particular species of four-footed animal. Every Englishman at the present day, however, attaches practically the same meaning to the word; whenever he hears it he takes it for granted that the speaker refers to the same thing as that with which the sounds are associated in his own mind, and he knows that when he uses the word it will call up in the minds of his hearers the same picture which exists in his own.

To learn a language, therefore, means to learn a particular set of sounds, and groups of sounds, and to learn also what are the ideas, thoughts, and feelings for which they stand, of which they are the symbols, in the minds of the native speakers of the language.

It is of the highest importance, if we wish to understand the real nature of language, to realize fully that words consist of sounds, which are uttered and heard, and not of letters, which are looked at.

Owing to the large part which books play in education, people have come to hold strange views concerning language, and some actually think that the letters, which make up the written word on paper, are the real language, and that the sounds, which we can hear, are only of minor importance. It is probable that we should find it easier to grasp the real external facts of language, which are its sounds, if we knew nothing about writing and spelling at all, and could only think of language as being uttered sounds. A little consideration of the question shows us that the letters are very unimportant compared with the sounds, and that when we study a language, it is the sounds and their meanings which must mainly concern us.

Let us think for a moment of the relation of the written word to actual speech.

Language, of course, existed and was handed on for ages before writing was invented, and there are plenty of races at the present day who have fully developed languages in which they can express everything that is in their mind, but who have no system of writing. Even in England and other highly civilized countries there are still old people who never learned in their youth either to read or to write. For such people as these it is clear that language only exists as something which is spoken. We see, then, that the life of language may be quite independent of writing and spelling.

What is writing? It is simply a clever and convenient device by which certain symbols, which we call letters, are used to represent the sounds of speech. Words are built up of a collection of several sounds, and so when we write we

are supposed to use a letter for each sound of which the word is composed. Letters in themselves are not language, but merely symbols which are used for the sounds of which language is composed. There is no life or meaning in written symbols by themselves; but they must be translated, as it were, into the sounds for which they stand before they become language or have any meaning. We become so accustomed to the look of letters, in groups to represent words, that we learn to read them off quite rapidly into the sounds for which they stand. Even when we read silently, without pronouncing the words aloud, we carry out the process mentally, and often unconsciously, of turning the letters into the sounds which each represents, and in this way we get at the meaning of what is written.

We have already said that the sounds of speech themselves are only the symbols of thoughts, not the thoughts themselves. Written words, however, are still further away from the thoughts and ideas than spoken ones, for they are only the symbols of these — that is to say, (a) they are symbols of symbols.

Spoken language, then, comes first, and is the reality of speech; written words are a late invention, and have no life beyond that which the reader puts into them, when he pronounces the sounds for which they were written.

You sometimes hear it said that we ought to pronounce in such and such a way, because the word is so written. But (b) this is putting the cart before the horse. It would be more correct to say that when words were first written, they were written in such and such a way, in the attempt to put down as accurately as possible, by means of the written symbols, the sounds which occurred in living pronunciation.

問1 言語を習得するとはどういうことか。筆者の主張を説明しなさい。(80字以内)

問2 下線部 (a) はどういうことか。わかりやすく説明しなさい。(80字以内)

問3 下線部 (b) における筆者の主張を具体的に説明しなさい。(100字以内)

※超長文の読解問題というと、最近の大学入試の専売特許のように思われがちだが、滋賀大学経済学部の1990年代初頭の出題である。以前から一部の大学が、年度によっては、これくらいの、あるいはこれ以上の超長文も出題している。ただし全体的な趨勢としての超長文化は近年の傾向である。

この問題を取り上げた理由はそうした懐古趣味からではない。この文章が書かれたのは入試に出題されるよりもさらにずっと以前である。文字言語が音声から或る程度、自立して獲得する表意性にはいっさい触れていない（このことは表意文字であるとされる漢字に限ったことではないにもかかわらず、言及されることはまずない）が、言語の基本的な理解に関わる文章であり、一読の価値はある。また記述問題対策として、国公立大学受験生を中心に、取り組む価値は十分にある。ただし、こうした設問に対する基本的な解答法が身につけていれば、設問自体は平易である。

【解答例】

- 問1 ある言語に特有の音声とその組合せを習得すると同時に、その言語を母国語とする人々の心の中でそうした音声が表示している概念や思考や感情を習得することである。(75字)
- 問2 音声自体が思考を表すための記号であるが、文字はさらにその音声を表すための記号にすぎず、言語としての意味を持つためには音声に置き換えなければならない。(74字)
- 問3 言語は音声为先であり、文字は単語の発音をできるだけ正確に書き表すために後から考え出された記号にすぎない。したがって単語を文字で書かれた通りに発音すべきだという考えは本末転倒である。(91字)

【解説】

- 問1 「言語を習得するとはどういうことか」について書かれている箇所を特定することがすべてである。その箇所が短い第二段落であることさえ見抜ければよい。前後の段落の内容を付け加える必要はいっさいない。
- 問2 下線部(a)のある段落の内容をまとめるだけでも解答として不足はない。
- 問3 これも下線部(b)のある段落内で処理できる。putting the cart before the horse「本末転倒」がわからなければ、この表現を用いる必要はまったくない。

【全訳】 私たちは他人の中で何が起きているのかを、直接心の中をのぞき込んで知ることにはできないし、また他人も私たちの心の中に何かがあるのか〔私たちが何を考えているのか〕を知ることができない。それができるのは、絵、像、身振り、合図のいずれであろうと、何らかの記号〔表象〕によるか、あるいは話し言葉の場合のように、内部にあるもの、したがって心が外部に表れた記号である或る種の音声による場合だけである。記号は何か他のものを表しているが、その記号とその特有の使い方を熟知している人間は、その記号を識別し理解する。記号の中には、たとえば絵や像のように、誰にとっても意味を持つものもある。そうした記号を理解する前にその記号を特に学ぶ必要はない。したがって、馬や木の絵は、こうした物を見たことのある人間であれば誰にでも「馬」や「木」という観念を即座に伝える。しかし、発声器官によって発せられる音声のような記号は、絵と同じ普遍的な意味を持っていない。だから、ある言語を習得して、話者が個々の特定の音声、あるいは音声の集まり----つまり単語----に与える意味がわかるまでは、そうした音声を理解できない。そうしたものは私たちに何の意味も伝えない。なぜなら、たとえば“horse”のような単語を構成している音声の集まりが、必ずある特定の種の四つ足の動物という概念を伝えなければならない絶対的な理由はないからだ。しかし、今日の英国人は誰でも、“horse”という単語に実際には同じ意味を付与している。彼らは、この単語を聞いたときに、自分の心の中でその音声結びつく物〔その音声を聞いて自分が心の中で連想する物〕と同じ物のことを当然、話者が言っているのだと考えるし、また自分がその単語を使うと、自分自身の心の中に存在するのと同じ映像が聞き手の心の中に喚起されることを知っている。

したがって、ある言語を習得するということは、一連の特定の音声や音声の集まりを習得し、またその言語を母国語とする人々の心の中でそうした音声が表示している、つまりそうした音声記号になっている、概念や思考や感情がどのようなものであるかを習得することである。

もし言語の本質を理解したいと思うのであれば、語は口頭で発して耳で聞き取る音声から成るものであって、目で見える文字から成るものではないということを十分に理解することが最も重要である。

教育において書物が果たす大きな役割のために、人々は言語に関して奇妙な考えを持つようになっていて、なかには、紙の上に書き言葉を構成する文字が本当の言語であり、耳で聞くことができる音声はあまり重要でないと実際に思っている人もいる。もし仮に私たちが文字を書くことや文字を綴ることについてまったく何も知らず、言語を口頭で発せられる音声だと考えることしかできなければ、音声という、言語の本当の現象的事実を理解することがもっと容易になるだろう。この問題を少し考えれば、音声と比べると文字は非常に重要性が低いこと、そして、言語を学ぶとき、私たちが主に関心を持たなければならないのは音声とその音声の意味であることがわかる。

書き言葉と実際の話し言葉の関係を少し考えてみよう。

もちろん、文字が発明されるずっと前から言語は存在し、伝えられていたし、また現在でも、自分の心の中にあることをすべて表現できる言語を十分に発達させているが、まったく文字を持たない多くの民族が存在する。英国や他の高度な文明を持つ国々においてさえ、若いとき読み書きをいっさい習わなかった老人が今でもいる。こうした人々にとっては、言語が話されるものとしてのみ存在することは明らかである。そうになると、言語の生命は文字を書くことや文字を綴ることとはまったく無関係かもしれないことがわかる。

書くこと〔書き言葉〕とは何なのか。それは、私たちが文字と呼ぶある記号を用いて話し言葉の音声を表現する、賢明で便利な仕組みにすぎない。単語はいくつかの音声が集まって出来ているので、書くときは、その単語を構成している一つ一つの音声に対して一つ一つの文字を用いることになっている。文字それ自体は言語ではなく、言語を構成している音声を表すために用いられる記号にすぎない。書かれた記号にはそれだけで生命や意味があるのではない。書かれた記号は、言語になる前に、つまりどんな意味であろうと意味を持つ前に、その記号が表す音声にいわば翻訳する必要があるのだ。私たちは、集まって単語になっている文字を見ることにすっかり慣れてしまっているので、そうした文字をそれが表す音声に実に素早く読み変えられるようになる。単語を声に出して発音せずに黙読するときでさえ、文字をそれぞれの文字が表す音声に変えるという作業を、頭の中で、しばしば無意識のうちに行なっている。このようにして私たちは書かれたものの意味を理解するのである。

話し言葉の音声それ自体は思考の記号にすぎず、思考そのものでないことはすでに述べた。しかし書かれた言葉は、話された言葉よりも思考や概念からいっそう遠く離れている。なぜなら、書かれた言葉は話された言葉の記号にすぎない----つまり、(a) それは記号の記号である----からである。

したがって、話し言葉が先であり、話し言葉が言語の実体〔本質〕である。書き言葉は、後になって考え出されたものであり、書き言葉が表している音声を読み手が発音するとき、その言葉に吹き込む生命以上の生命を持ってはいない。

単語がそのように書かれているのだから、私たちはそのように発音しなければならないと言われるのをときどき耳にする。しかし、(b) これは本末転倒である。単語が最初に書かれたときに、実際に発音する際に生じる音声を、書かれた記号(文字)によって、できるだけ正確に書き留めようとして、そのように書かれたのである、と言ったほうが正確だろう。